



神と共に生きる
いつくしみの特別聖年①

人生にはいろんな節目をどう生かすか目がある。万人共通の節目が変わる。人間新年という節目、それが節目という目に見えを機に飛躍する人もあないものに影響を受ければ傍観する人もいる。るのは、精神的要素



初代教皇聖ペトロから数えて266代目教皇フランシスコ

が大きいことである。人間は、精神的要素

見えない神への信仰は、今まで以上に大切なものだと思いはじめた。それは老いたからだけではあるまい。

ローマ教皇フランシスコは昨年十二月八日から今年十二月二十日まで「いつくしみの特別聖年」と公布した。

「聖年」とは旧約聖書・レビ記に記述されている「ヨベルの年」に由来する。五十年に一度を聖年とし、神がつけられた元の状態に戻る「自由と解放の聖なる年」のことで、奴隷は解放され、借金は帳消しにされたという。

三千年以上も前に、神がモーゼを通してイスラエルの民、未熟な人類に対して示された聖年・ヨベルの年。特別聖年の公布を機に改めて

レビ記を読むと、これは神が現代社会に示されたもののように思える。

目

イエス・キリストの言動が書かれた新約聖書とともに、ユダヤ教の聖典、旧約聖書も聖典とするカトリック教会は、紀元一三〇〇年以降

この聖年を受け継ぎ、二十五年に一度、聖年とする。ヨーロッパを旅する

と、各地で巨大な聖堂に出会う。中世の教会がいかに強大な権威と特権を持っていたかの象徴にも思える。

中世からの聖年は旧約時代の弱者への自由と解放の聖年ではなく、個人の「罪と罰」の罰の免除がバチカンへの巡礼によって与えられた。

つまり巨大な教会の権威と特権が人々に畏敬の念を与え、結果として神を仰ぎ見る信仰だつたように思える。しかしそれが、見えない神が目に見えるようにイエスを遣わされ、人々に神の愛を示されたこと

に合致するのかもしれない。疑問が残る。「神を仰ぎ見る信仰」ではなく、愛である神と共に神のいつくしみの心を実践する生き方こそが神への信仰ではないだろうか。実践のない信仰に何の意味があるのか。

破壊による自然災害が増えるなど、今さまざまな分野で人類は曲がり角を迎えている。物質的豊かさが他人を必要としない、他人と交わらない利己主義を増やし、虚無主義的考え方から周囲の人や出来事に無関心になる傾向が強い。無関心は罪の意識を持たせず自分が当事者という自覚がない。教皇は「無関心に勝ち、平和を得よう」と言われる。マザーテレサも「愛の反対は憎しみではなく無関心だ」と言った。

教皇は特別聖年の元旦の「世界平和の日」という節目に「無関心に勝ち、平和を得よう」というメッセージを発表された。二十一世紀を迎え、過激集団ISなどによるテロが各地で起きています。また、資本主義社会はごく一部の人が富が集中し、貧しい人々の間に展望なき閉塞感が漂う。環境

の中で教会も原点に立ち返り、いつくしみの心を持つて生きることを実践するよう「特別聖年」という節目で呼びかけられた。これは国家、民族、宗教の枠を超えた地球市民として誰もが考え、行動する課題のように思える。

環境

環境

環境